

〈研究資料〉

ジャック・ラカンの論文『鏡像段階』の試訳

——人権の主体の意味を精神分析理論から考えるための準備作業——

田 村 公 江

は じ め に

「子どもは権利の主体であり得るか」このテーマを精神分析の知見を取り入れて考察することが、筆者の長期的な研究テーマである。「子どももまた人間である」という素朴な発想においては「子どもに人権があること」は自明である。とはいえ、子どもが生存や発達において大人に依存していることや、まさに発達途上であることに鑑みれば、子どもの人権と大人の人権の間に違いが設けられることは当然である。すなわち、子どもには単に生きていることだけではなく適切な養育を受ける権利や教育を受ける権利が特に強調されるべきであるし、参政権は制限されてよい。子どもの人権については大人の人権保障とは別の留意点があるのだから、「子どもの権利条約」があることは、非常に意義深い。

日本においては、1947年制定の学校教育法第11条で教師の体罰が禁止されているにもかかわらず、学校とりわけ部活における体罰が長い間、黙認されてきた。桜宮高校バスケットボール部体罰自殺事件（2012年）以降、体罰への社会の目が厳しくなっているとはいえ、体罰はたびたび発生している。2019年には児童虐待防止法および児童福祉法に「体罰の禁止」を明文化する改正が行われた（施行は2020年4月から）が、「しつけには、場合によっては体罰が必要」という考え方は今なお根強い。

子どもの権利という観点から発想するなら「体罰とは暴力であり人権侵害である」ということになる。しかし、日本社会においてはそもそも「しつけとは何か」について理解が熟していないところがある。筆者が教室で学生たちに「しつけとは

何だろう」と問いかけると、「子どもにやって良いことと悪いことを教えること。悪いことをしたらきちんと叱ること」という趣旨の答えが返ってくるが多い。体罰について、学生たちはおおむね反対なのだが、「子どもが万引きをしたら叩いて叱る」ことについては肯定的に捉える傾向がある。「その時にきちんと叱っておかないと、もっと道を踏み外すかもしれない」という説明してくれた学生もいる。また、「どのように言い聞かせても言うことを聞かないとき」には「怪我をさせない程度なら体罰もやむを得ない」と考える学生も少なくない。また、「体罰がだめなら、どうすればよいのか」という疑問を投げかける学生もいる。

そもそも日本社会には権利意識という発想があまり浸透していない。たとえば、車いすユーザーが公共交通機関を使う際には、健常者ならば必要としない手助けが必要になることがある。そういう手助けについて、車いすユーザーが「当然の権利」として要求すると、それに対して違和感や不快感を持つ人が多い。「権利に基づく要求」は凶々しい、わがままと受け取られやすい。言い換えれば、自分で自分のことができない障害者は健常者に「お願いする姿勢」や「お礼を言うこと」が求められる。

思い返してみると、日本で行われている人権教育は、多くの場合、学習者を潜在的加害者と想定している。もちろん、人権侵害をしてはならないと教えることは必要である。しかし、ここには「もしも自分が人権侵害を受けたらどうしたらよいか」という観点が欠落している。特に子どもの場合、学校教育法11条を知っている子どもがいったい何%いるだろう。学生と話していると、

「親に養ってもらっている間は口答えするな」と家庭で言われていて、それを、大学生になっても、仕方がないことだと感じている人が少なくない。子どもを養うことは親の当然の義務のはずなのに、なぜ、このようなことを言われて納得してしまうのだろうか。ここには、大人が目上であり子どもは目下であるという上下関係の感覚があり、それは実に根深い。

「子どもの権利」という概念はこのような上下関係の感覚を乗り越えていくために、非常に有効であると筆者は考える。とはいえ、法哲学的にはデリケートな議論があることも忘れてはならないだろう。筆者は、法哲学者、大江洋の論文「子どもの権利を問うこと」(2010)を読んで非常に考えさせられた。前掲書において大江は、子どもの権利の非自明性について精密な考察をしている。箇条書きで要約する。

第1 歴史的な非自明性

子どもは近代という時代において発見された存在(小さな大人ではなく子どもという固有の存在)であり、子どもは大人とは違って、要保護性・変容・発達性(それに伴う可塑性)を持つ。変容・発達性について重要なのは、「子どもの成長というプロセス自体が何らかの程度で存在すること、そしてそのプロセスは他者の働きかけなしには発現しないこと」である。

第2 権利内容をめぐる非自明性

子どもが社会を担う一員となるには教育を受ける必要がある。では具体的にはどのような教育を提供すればよいのだろうか。子どもを教育することは決して自明的には語れず、教育の目的や意味が問われてくる。

第3 権利語法の非自明性

子どもが家庭において適切な養育やしつけを受けること、子どもが社会において適切な教育を受けることは、どうしても権利という概念をベースに考えなければならないのだろうか。たとえば、親が適切な養育をしない場合、「適切に養育されることは子どもの権利である」とい

う言い方をすることはできるが、それは、適切な養育をしない親を処罰することに結び付くのだろうか。むしろ、虐待が深刻化する前に親への支援をすることが重要であるし、そもそも、子どもが必要としている親の愛は、法的措置や処罰という手続きとは別の次元にある。

法哲学におけるこのような議論を読んで筆者がつくづく感じたのは、リベラルな近代社会においては人権という概念が「個人」という人間観のもとで理解されているということである。子どもが権利の主体として自明でないことは、端的に言えば、子どもが十全な意味での「個人」ではないという見方から来ているように思われる。「個人(individual)」とは言うまでもなく「これ以上分割できない存在」のことであり、他者との境界線がはっきりしていて、独立している。人間を「個人」と捉えることは、近代社会において当たり前のことではあるが、「個人」という人間観は非常に人為的なもの、擬制的なものではないだろうか。精神分析の知見においては、「個人」という人間観が擬制的なものであるという捉えの方が、むしろ常識である。筆者は、精神分析、特にジャック・ラカンの精神分析の思想において練り上げられてきた人間観において、大人もまた擬制的にしか人権の主体ではないことを示そうと思う。

周知のように、ラカンは「主体」という概念を自明なものとして措定しない。ラカンが「主体」という時、それは「斜線を引かれた主体」であり、何かを語ることに於いて、「～と語った者」という仕方です事的に現れる、とされている。またラカンは、「欲望は他者の欲望である」と言う。この場合の「他者」とは「大文字の他者」であり、具体的な誰それを指しているのではない。「斜線を引かれた主体」は「大文字の他者」を介して何かを欲望するのである。

一方、リベラリズムの人間観は、独立した存在、自己決定の主体である。他者に危害を及ぼすことがない限り、国家は個人の自由に介入してはならないという、いわゆる危害原則は、リベラリズムの根幹をなす考え方である。これは近代社会

においてなくてはならない思想と言える。しかし、リベラリズムの人間観は決して万能ではない。たとえば、臓器売買について考えてみよう。当事者同士が十分な情報に基づいて自己決定しているなら問題ない、と言い切れるだろうか。リベラリズムが万能ではないことが明らかになるのは、人と人の間に何らかの強弱関係がある場合である。弱者の側にいる人は、自己決定によって、自分に不利なことを選ぶ（選ばざるをえない）ことがある。

ラカンの人間観は、人と人の間に強弱関係がある場合、強者の側もまた「斜線を引かれた主体」であることを示してくれる。そして、強弱関係がどのような「大文字の他者の欲望」によって発生しているのかを考えさせてくれる。特に、子どもの権利を考える場合、大人もまた「斜線を引かれた主体」とであるという視点は、子どもと大人の関係を考える上で示唆に富むであろう。

研究資料のテキスト

ジャック・ラカンの初期の概念に「鏡像段階」というものがある。この概念はラカンの思想において出発点となったものであり、想像界－象徴界－現実界という3つの領域という用語や、大文字の他者（L'Autre）という概念を構想する中で、より豊かに考察されていった。

ラカンは、乳児が鏡を見て、そこに映っているのが自分であると気づくことに注目した。この論文が書かれた時、まだ「斜線を引かれた主体」や「大文字の他者」という概念は使われていない。しかし、「私」というものが成立したその時からすでに、鏡を見ている「私」と鏡像の「私」という二重性があったこと、そして、その二重性は決して統合されないことをラカンは語っている。また、「鏡像段階」の論文は、ラカンの数少ない『書かれたもの』（L'Ecrits）に収録されている。というわけで、この論文をきちんと読むことを研究計画第一歩とする。

この論文は33の段落から成っている。段落ごとに、できるだけ原文と対照する形で翻訳していく。ラカンの文体は非常に読みづらく、筆者の能力不足のために誤訳になったところが多々あると

思うが、翻訳を通してラカンの思想について考察することが目的であるので、お許しいただきたい。

なお、この論文は学会における口頭発表として書かれたものなので、翻訳する際、「ですます」の語尾にした。

試訳の中で〔 〕でくくった部分は筆者による補足である。

【タイトル】

精神分析の経験において私たち^(訳注1)に明らかになった、「私（Je）」^(訳注2)の機能を形成するものとしての鏡像段階

1949年にチューリッヒで開催された第16回国際精神分析会議で行われた口頭発表。刊行された原稿の初出は^(訳注3)、1949年『フランス精神分析誌』13巻、4号、pp 449-455。

【第1段落】

13年前の会議で私が導入した^(訳注1)「鏡像段階」という概念は、それ以来、フランスの分析家グループ^(訳注2)の用法において多少なりとも通用するものになっていましたので、この概念に皆さんの注意を喚起してもよろしいかと思います。特に今日、精神分析が私たちに与える経験において、この概念が「私（je）」の機能に投げかける光について、そう言えるでしょう。この経験について言わなければならないこと、それは、この経験は、コギト^(訳注3)に由来するすべての哲学と私たちを根本的に対立させるということです。

【第2段落】

皆さんの中には、比較心理学上のある事実によって明らかにされている行動の様子－私はこの行動から話を始めるわけですが－のことを思い出す方もおられるでしょう。つまり人間の子どもは、ある短い期間、道具的知能においてチンパンジー以下の月齢であっても、鏡に映る像を自分の像であると認知することができるという事実のことで。子どもが鏡に映った像を自分の像だと分かっていることは、「アハ体験」^(訳注1)という明快な身振

りによって示されています。「アハ体験」とは、ケーラー^(訳注2)によれば状況の統覚が発現することであり、「アハ体験」が見られる時には知性が働いていることが確実なのです。

【第3段落】

猿の場合は鏡に映る像を支配しようとしてもむなしいことに気づくと飽きてしましますが、人間の子どもの場合、すぐにまた活発な一連の身振りを示します。この一連の身振りにおいて、子どもは、鏡に映る像の動きと鏡に映し出されている周りのものとの関係性、そしてまた、鏡に映っている自分の像と周りのものから成る複合とそれとそっくりの実物、すなわち、自分自身の身体や周りにいる人々、さらには彼の傍らに差し出されている諸対象との関係性^(訳注1)を、おもしろがりながら経験しています。

【第4段落】

ボードウィン^(訳注1)の研究から知られているように、このような出来事は月齢6カ月になると生じます。それが繰り返して生じることを見て、乳児が鏡の前で示すハッとさせるような光景について、私はじっくり考えてみました。歩くことはもちろん立つこともできず、人に抱かれてか何かの人工物（フランスでは歩行器と呼ばれているもの）に入れられてか、いずれにせよ何かに支えられている乳児が、大喜びで手足をばたばたさせて、支えの制約に逆らって少し前のめりになる姿勢をとったり、姿勢を固定して、その瞬間の鏡像の様子を取り戻そうとしたりします。

【第5段落】

この活動が、私が上で述べたような意味を保つのは月齢18カ月までです。この活動は、パラノイアの認識^(訳注1)についての私の考察に組み込まれている人間世界の存在論的構造のことを明らかにするのと同じくらい、その時期まで不確かだったリビドーのダイナミズム^(訳注2)のことも明らかにしてくれます。

【第6段落】

そのためには〔鏡像段階をこの文脈で理解するには〕^(訳注1)、鏡像段階を一つの同一化と捉えておけば十分です。ここで同一化と言ったのは、精神分析が与えている十全な意味での同一化のことです。すなわち、主体が一つの像を我がものとする時に主体において作られる変身です。この像がこの局面でこのような効果を持つように宿命づけられていることは、〔精神分析の〕理論における「イマーゴ」という古代の用語の用法によって十分に示されています。

【第7段落】

まだ自分で動くことができず食べることも人に頼っている状態にあり、まだ infant〔話せない人〕の段階にある小さな人が自分の鏡像を大喜びで我が物とすること、その様子は、「私」が根源的な形で先取りされる象徴的基盤^(訳注1)を模範的な状態で示しているように見えます。先取りされるというのは、「私」というものが他者との弁証法的同一化によって客体化される前に、ということです。言語が、「私」というものに主体という機能を普遍的なものにおいて再建する前にということです。

【第8段落】

さらにこの形〔上で述べた根源的な形〕は、よく知られている用語法〔精神分析の用語法〕の言葉で言い直したなら、二次的同一化^(訳注1)の台木にもなるであろうという意味において「理想自我」(je-idéal) と呼ばれるべきでしょう。二次的同一化という言葉で私たちは、リビドーを正常化する諸機能のことを認めてきたのです。しかし重要な点は、この形が、「自我 (moi)」という審級を、その社会的規定に先立って、単独の個人に向けて還元することが決してできない一筋のフィクション（虚構）の中に位置付ける^(訳注2)ということなのです。あるいはむしろ、単独の個人というものは、弁証法的総合—それによって、自我は、「私」として、自分自身のリアリティとの不一致を解決しなければなりません^(訳注3)—の成功がどのようなものであれ、漸近的にしか「主体の生成」にたど

りつけないであろうということです。

【第9段落】

身体の全き形は－主体は身体の全き形によって、自らの力の成熟に幻影の中で先んじます－ゲシュタルト^(訳注1)としてしか、すなわち、外面性においてしか、主体に与えられません。外面性においては、たしかに、この形は構成されたものというよりは構成するものなのですが、外面性においてはとりわけ、この形は、主体が自分でそれを動かしていると感じている動きの騒々しさとは反対に、この形に凝固し、左右逆転している身の丈の立体感をもって主体に現れます。このゲシュタルトのプレグナンツ法則^(訳注2)は、それを動かすスタイルがまだ錯覚的であるとはいえ、空間に結びつけられたものとして理解されなければなりません。このようなゲシュタルトは、その現れ方の2つの側面によって、疎外という運命を先取りする^(訳注3)と同時に、「私」のメンタルな永続性を象徴します。このゲシュタルトは、「私」をその彫像へと統一する一致についてはまだ粗いものです。彫像において人間は、彼を支配する亡霊たちに向けて自らを投影するのと同じように、自分が製造した世界が曖昧な関係において完成されていく場であるところの自動装置に向けて自らを投影します。

【第10段落】

イマーゴに関して申しますと、私たちは、日々の〔分析〕経験と象徴的效果^(訳注1)の薄明りの中でイマーゴの覆われた顔がくっきりと輪郭づけられるのを見るという特権を持っているわけですが、鏡像は実際、目に見える世界への入り口のように思われます。幻覚や夢の中に自分自身の身体のイマーゴが現れるとき、現れるのが自分の個人的な特徴、さらには、自分の身体運動の不如意や対象への投影であっても、自分自身の身体のイマーゴは鏡の中の配置を呈しているのですが〔鏡に映っているように現れるのですが〕、そのような現れ方を私たちが信頼するなら、あるいは、心的リアリティ、ただし同型ではなく異型のリアリティが現れる場である鏡という、複製を出現させる道具

の役割に注目するなら、鏡像は目に見える世界への入り口であると思われるのです。

【第11段落】

ゲシュタルトが有機体に対して形成する効果を持ち得るということは、生物学的な実験によって確かめられています。もっとも、この実験は精神的因果性という観念とは実に関係ないので、そういうものとして〔ゲシュタルトは有機体に対して形成する効果を持ち得るという〕公式に持ち込むことはできません。この実験がそれ〔形成する効果〕についてこの上なく明らかにしているのは、鳩の性腺の成熟に不可欠な条件は同じ種の個体を見ることだ、ということです。性別は関係ありません。そして、それだけで実に十分なので、鏡に映る自分が見えるところに鳩を置くことだけで、同じ効果が得られるのです。同様に、同じ系列の現象として、イナゴの「孤独相」から「群生相」への移行^(訳注1)があります。この移行は個々のイナゴを一定期間、それと似た像にもっぱら視覚的に接するようにすることで獲得されるのです。同じ種のイナゴの動きに十分に近い動き方でその像が動かされていればよいのです。これらの事実は、同型的な同一化の次元に含まれるものです。ここには、形成的なものとしての、また、性的刺激を与えるものとしての美の意味という問題^(訳注2)が隠されています。

【第12段落】

しかし、異型の同一化として知られている擬態^(訳注1)という事実も、生きている有機体にとって空間の意義という問題を提起している限りにおいて、ここでは私たちにとって少なからず興味深いものです。心理学的概念もまた、これらの事実を適応といういわゆる主要法則に還元するために試みられている滑稽な努力に決して劣ることのない光を、ここに投げかけることができるでしょう。ともかく、ロジェ・カイヨウ (1913-1978) のような人の思想（若く、彼が養成された社会学の拘束から逃れたばかりの頃の思想です）が放っているきらめきを思い出しましょう。擬態と伝説的精神衰弱^(訳注2)という言葉のもとに、彼は、形態論的

擬態を、現実感を失わせるその効果において、空間に支配されるという強迫と同じ類のものとししました^(訳注3)。

【第13段落】

パラノイアのなものとして人間の認識を構成する社会的弁証法において、私たち自身、次のような理性〔の働き〕を示しました。すなわち、理性は人間の認識を、欲望の力の領野に属するものとして動物の認識よりも自律的なものに行っているが、それと同時に、理性は人間の認識を、シュールリアリストの不満足がそこで暴いているあの「わずかな現実性」^(訳注1)において規定しているということです。以上のような考察をしてみて、私たちは、鏡像段階が明示している空間的取り込みにおいて、人間の自然な－もし自然という言葉に一つの意味を与えるならですが－リアリティの有機体的機能不全がもたらす結果を再認識する気になるのです。

【第14段落】

イマーゴの機能は、生物^(訳注1)とそのリアリティ、あるいはよく言われているように内界と環世界^(訳注2)の関係を打ち立てることなのですが、鏡像段階の機能はその時以来、私たちにとって、イマーゴの機能の特殊なケースであることが判明します。

【第15段落】

しかし、自然に対するこの関係は、人間においては、自らの内での生体の分裂^(訳注1)、また、新生児期の数ヶ月、不快感や協調運動不能の身ぶりから明らかに見て取れる「根源的不調和」によって、損なわれます。錐体路^(訳注2)の解剖学的未完成という客観的概念は、母体からの液体への依存が長く続く^(訳注3)という客観的概念と同様、人間が明らかに紛れもない未成熟な状態で誕生するという所与として、私たちが公式化したこの見解が正しいことを裏付けてくれます。

【第16段落】

ついでに、〔人間が未成熟な状態で生まれると

いう〕この所与の事実は、中枢神経の上部器官、とりわけ大脳皮質と言われる器官の優位性^(訳注1)を定義するために、発生学者たちによって胎児化^(訳注2)という言葉で認知されているということに注目しておきましょう。精神病への外科的な介入は私たちに、それ〔大脳皮質〕を、生物の内部にある鏡と理解させます。

【第17段落】

この発達には、個人の形成を歴史の中に決定的に投影する一つの時間的弁証法として生きられます。すなわち、鏡像段階は、その内的圧迫^(訳注1)が〔乳児の〕無力さから〔自己イメージの〕先取りへと急激に進行する一つのドラマなのです。また、それは、空間的同一化の似姿^(訳注2)に捕らわれた主体にとって、ファンタズムを－それらは、寸断された身体のイメージ^(訳注3)から、全体性を持ち、私たちが「正しく整った」^(訳注4)と呼ぶ形へと継起していきます－ようやく我がものにされた防具から疎外的同一化^(訳注5)へと組み立てるドラマでもあります。そして疎外的同一化は、その厳格な構造でもって、メンタルな発達全体を印付けて行きます。こうして、内界から環世界に至る円の切断は、自我の照合という汲み尽くせない積分を生み出すのです。

【第18段落】

寸断された身体という言葉は、私は、私たちの理論的参照体系にも受け取らせたのですが、分析の動きが個人の攻撃的解体という水準に達する時、寸断された身体は必ず夢に出てくるのです。それ〔寸断された身体〕はその時〔分析の動きが攻撃的解体の水準に達する時〕、内的迫害に備えて羽を生やしたり武装したりしている、バラバラにされた手足や外から見えるように表された内臓という形で現れます。それらを、幻視者ヒエロニムス・ボス^(訳注1)は絵画によってかつてないほど生々しく固定しました。ボスの絵は、現代人の想像力の頂点に、15世紀にすでに達していたのです。しかしこの形〔バラバラにされた手足や外から見えるように表された内臓という形〕は、〔ボスが描いたような怪奇的な絵ではなく〕器官その

ものの面において、統合失調症やけいれんやヒステリーの徴候において明白な幻想的解剖学を定義する脆弱化の線^(訳注2)に沿って、明白に示されます。

【第 19 段落】

〔寸断された身体がバラバラにされた手足や内臓という形で夢に現れるのと〕 相関的に、「私」の形成は、夢幻状態において、塹壕で防御された野営地、さらには競技場によって象徴されます。内部の闘技場から〔外に向かって〕、闘技場の城壁、瓦礫、城壁を囲む沼地があり、対立する二つの闘争の場が配置されています。この二つの闘争の場において、主体は、高みを目指して^(訳注1)身動きできなくなっています。遠くには内なる城があり、この城の形は（しばしば同じシナリオの中に並置されています）印象的な仕方です「エス」を象徴しています。そしてまた、私たちは、ここに、メンタルな面において、固く防御された建造物のこれらの構造^(訳注2)が実現されているのを見出すのです。その隠喩（メタフォー）は、主体の症状そのものの結果として自発的に現れ、逆転、分離、二重化、無効化、移動、強迫神経症のメカニズムを示すのです。

【第 20 段落】

しかし、これらの主観的所与だけに頼っていたら、私たちがそれらを〔分析〕経験の条件からほとんど切り離さないとしても－分析経験のおかげで私たちはそれらが言語の技術に属する^(訳注1)ものだということがわかるのですが－私たちの理論的な試みは、一個の絶対的主体という思考不能の中に自分を投影しているという非難にさらされるでしょう。そういうわけで私たちはここで、客観的所与の援助の上に基礎づけられている仮説において、「象徴的還元」という方法を使う際の手がかりの一覧表^(訳注2)を探し求めたのです。

【第 21 段落】

それ〔手がかりの一覧表〕は、「自我の防衛」の中に発達に沿った秩序を設立します。発達に沿った秩序というのは、アンナ・フロイト氏^(訳注1)に

よって、彼女の主著^(訳注2)の第 1 部において公式化された意向に應えるものであり、（しばしば表明されている偏見とは逆に）ヒステリーの抑圧やその回帰を、強迫的逆転やその分離プロセス－それは、鏡に映る「私」が社会的「私」に旋回する時期に始まるパラノイアの疎外に先行するようなプロセスそのものです－よりも古い時期に位置づけています。

【第 22 段落】

鏡像段階が達成されるこの瞬間は、同類^(訳注1)のイマーゴへの同一化と根源的な嫉妬のドラマ（シャーロット・ビューラーの学派によって幼児期の転嫁^(訳注2)という事実において非常に強調されています）によって、社会的に作り上げられた状況へと「私」を結びつける弁証法の端緒となります。

【第 23 段落】

〔鏡像段階が達成される〕この瞬間こそが、人間の知のすべてを他者の欲望^(訳注1)によって媒介化されるものへと決定的に傾け、他者との競争による抽象的な均衡においてその対象を構築し、「私」を次のような装置にするのです。すなわち、この装置にとっては、本能の圧迫全体が、たとえそれが自然な成熟に應えたとしても、一つの危険になるであろう、そういう装置です。なお、人間におけるこの成熟の正常化そのものは、それ以降、エディプス・コンプレックスにおける性的対象に見られるように、文化的仲介に左右されます。

【第 24 段落】

精神分析の教説には、この瞬間特有のリビドー備給のことを指している「一次的ナルシズム」という用語があります。私が提示した鏡像段階という概念のもとに^(訳注1)、「一次的ナルシズム」という用語の発案者たちは、その用語に潜在的に含まれている意味をもっとも深く感じ取るでしょう^(訳注2)。一次的ナルシズムを発見した人々は、ナルシズム的なリビドーと「私」というものが持っている疎外する機能、そして攻撃性^(訳注3)の間にある明らかな関係性を説明するために、破壊の本能さらには死の本能を引き合いに出しました

が、鏡像段階という概念は、このリビドー〔ナルシズム的なリビドー〕と性的なリビドーの間にあるダイナミックな対立のことも解き明かしてくれます^(訳注4)。攻撃性について補足しますと、攻撃性は、他者へのあらゆる関係性において、たとえもっともサマリア人的な援助の関係性においても、「私」というものが持つ疎外する機能から引出されるのです。

【第25段落】

つまり、一次的ナルシズムの発見者たちは、実存的否定性に触れたのです。実存的否定性のリアリティは、存在と無という現代哲学^(訳注1)（サルトルの『存在と無』1943年）によって実に生き生きと広められています。

【第26段落】

この哲学は残念なことに^(訳注1)、意識の自己充足の範囲内においてしか実存的否定性を把握しません。〔この哲学において〕意識は、この哲学の前提の中に記入されるために、自我という構築的錯覚に自律という幻影をつなぎとめています。奇妙にも分析経験からの借用を糧としている〔この哲学の〕機知は、実存主義的精神分析^(訳注2)を保証するという野心において頂点に達します。

【第27段落】

功利性の機能以外はもはや認めないようにしようという歴史的企ての後に、そして、〔功利性という機能以外はもはや認めないようにしようという〕この努力に応じて出現するように思われる強制収容所的な社会形態を前にした個人の不安において^(訳注1)〔実存主義は生まれました〕。実存主義は、その帰結である主観の袋小路について実存主義が与えている正当化から評価されるのです。〔主観の袋小路とは〕すなわち、刑務所の壁の中においてほど本物であることが確立されることは決してないような自由、いかなる状況であれ乗りこえることができない純粹意識の無力が表現される場であるアンガージュマンの要求、性関係の窃視症的－サディズム的な理想化、自殺においてしか実現されないパーソナリティ、ヘーゲルの殺人

によってしか実現されない他者の意識です。

【第28段落】

〔実存主義の〕これらの考え方に、私たちのすべての経験は、私たちが自我を次のようなものと理解することを分析の経験が妨げる限りにおいて、対立しています。すなわち、知覚－意識体系に中心づけられたものとして、認識の弁証法とはこの上なく相反する科学万能主義的偏見が公式化される場である《現実原則》によって組織されたものとして自我を理解する^(訳注1)ことです。そして、分析の経験は私たちが錯覚（*méconnaissance*）という機能から出発するように指示します。錯覚の機能は、アンナ・フロイト氏がかくも力強く明確化したすべての〔自我の防衛機制の〕構造において見て取れるように^(訳注2)、自我を特徴づけているものです。というのも、否認が錯覚の機能のあからさまな形を表しているとしたら、錯覚の機能の様々な効果は、「エス」が現れる場である宿命という面に反射された幾分かの光に照らされない間は、その大部分が潜在的なままだからです。

【第29段落】

「私」の形成に固有なこの無力さ^(訳注1)はこのように理解されます。そこにおいて、神経症のもっとも広い定義を見ることができるのです。すなわち、主体が状況によって捕らわれることが、狂気のもっとも一般的な公式を与えます。〔狂気というのは〕騒音と怒りで大地をどよめかしている狂気と同じく、精神病院の壁の中に存在する狂気のことです。

【第30段落】

神経症と精神病の苦しみは私たちにとって、魂の受難を学ぶ学校です。私たちが共同体全体へのその脅威の傾きを計算する時、精神分析という天秤は、都市の受難^(訳注1)を緩和する手がかりを私たちに与えます。

【第31段落】

今日の文化人類学が執拗に探究している自然と文化のこの接点において、精神分析だけが、愛

がいつも再解体あるいは切断しなければならない想像上の隷属の結び目^(訳注1)を、それと認めるのです。

【第32段落】

そのような大仕事にとって、利他的感情^(訳注1)は、私たちにとって確約なきものです。というのも私たちは、行為の底に横たわっている攻撃性、慈善家の攻撃性、理想主義者の攻撃性、教育家の攻撃性、さらには改革者の攻撃性を見抜くからです。

【第33段落】

私たちが保持している、主体から主体への訴えにおいて、精神分析は、患者が「おまえはそれだよ」^(訳注1)〔と他者から言われる時の〕恍惚の極限に行くまで、患者に付き添うことができます。ここでは、死すべきものであるという運命の表徴が患者に露わになるのですが、真の旅が始まる瞬間に患者を連れて行くことは、私たち臨床家だけで思いのままになることではありません。

参考文献

大江洋, 2010「子どもの権利を問うこと」, 愛敬浩二『講座 人権論の再定位2 人権の主体』法律文化社, p.139-157

Jaques Lacan (翻訳 Bruce Fink), 2002, *Écrits The First Complete Edition in English*, Norton & Company

訳注

【タイトル】

訳注1:「私たちに明らかになった」の「私たち」とは「私たち分析家」のこと。

訳注2:「私 (Je)」は、一人称の「私」のことであるが、第1段落で示されるように、「私は考える、故に私は存在する (je pense, donc je suis)」というデカルトの言葉を意識している。「自我 (ego)」と後に呼ばれることになるものが現れる前のことを言っている。まさに、人が「自我」をどのようにして獲得するかということがこの論文 (口頭発表) の主題である。

訳注3: 後に、ラカンの著書『書かれたもの (エクリ)』(1966) に収録された。

【第1段落】

訳注1: ラカンは、1936年に、マリエンバードで開催された国際精神分析協会 (International Psychoanalytical Association 略称 IPA) において鏡像段階についての口頭発表を行った。持ち時間を越したため、当時の学会長アーネスト・ジョーンズによって中断させられた。その時の原稿のオリジナルは残っていない。

訳注2: ここでは、パリ精神分析学会 (Société psychanalytique de Paris, 略称 SPP) のことを指している。ラカンはパリ大学で精神神経学を学び、1932年に『人格との関係から見たパラノイア性精神病』(エメの犯罪についての精神医学的考察)で博士号を取得している。ラカン自身が精神分析家になるための教育分析を受けたのは1932年から1938年にかけてであり、1934年にはパリ精神分析学会 (SPP) のメンバーとなっている。

訳注3: 精神分析を実践することでラカンが得た思想は、「考える私」が考えることと同時的に存在するのではないということである。ラカンによれば、「考える私」が他者とは独立に、自己同一的に存在するという思想 (コギトの思想) と精神分析の思想は相いれない。これは、西洋哲学史において長い間自明とされてきた人間観、すなわち、理性的、自律的存在者として、一個の独立した人格として存在するという人間観への挑戦である。

【第2段落】

訳注1:「アハ体験」とは、「わかった!」「そうか!」という感覚のこと。提唱者はドイツの心理学者カール・ビューラー (Karl Bühler 1879-1963)。

訳注2: ケーラーとは、ドイツの心理学者であり、ゲシュタルト心理学の創始者の一人である Wolfgang Köhler (1887-1967) のこと。ケーラーは類人猿の研究を通して、学習における洞察の重要性を発見した。その研究は1917年に *Intelligenzprüfungen an Anthropoiden* (類人猿の知恵試験) として出版された。なおこの著書の第2版 *Intelligenzprüfungen an Menschenaffen* を底本として英訳 *The Mentality of Apes* が1925年に出版された。

【第3段落】

訳注1：子どもは、鏡に映っているのが自分であると気づくだけでなく、自分の周りにいる人や物の像もその実物と対応していることに気づく。また、鏡に映る自分と自分の周りの人や物を見て、自分が周りにどのように位置づけられているかを把握する。この把握は、人が「私は3人姉妹です」と言うとき、人は、「3人姉妹の一人」であると同時に、「3人姉妹を外から見ている人」でもあることと同型である。

【第4段落】

訳注1：アメリカの心理学者、発達心理学者 James Mark Baldwin (1861-1934)

【第5段落】

訳注1：ここで「パラノイアの認識」と言われているものは具体的には何を指しているのだろうか。鏡に映っている虚像を介してリアルな世界の存在をつかむことを示唆しているのだろうか。

訳注2：「その時期まで不確かだったリビドーのダイナミズム」とは、乳児の心的エネルギーが鏡に映る像に向けられ、ここにフロイトが一次的ナルシズムと呼ぶ状態ができることを指しているであろう。

【第6段落】

訳注1：「そのためには～十分です」の原文は、「Il y suffit de comprendre」。英訳では「y」を「in this context」と訳しているの、カッコ内に「鏡像段階をこの文脈で理解するには」を補った。

【第7段落】

訳注1：「象徴的基盤」の原語は「la matrice symbolique」

【第8段落】

訳注1：フロイトは「ナルシズム入門」(1924)において、一次的ナルシズムと二次的ナルシズムを区別している。

訳注2：鏡像段階において子どもが我がものとする像(イメージ)は、自我という審級を、社会的規定に先立って、一筋のフィクション

において位置づける。自己同一的な「自我」は自然発生的にできるのではない。社会的に規定されるのに先立って、鏡像段階という人生のきわめて早期に自我という審級ができている。鏡像はリアルな存在とそっくりであるが、鏡像の完成度にリアルな「私」は決して到達できない。鏡像を我がものとするのが出発点であることによって、人間は生涯、理想自我というイメージにリアルな自分を合致させようとして、むなしい努力をすることになる。

訳注3：原文は、「quel que soit le succès des synthèses dialectiques par quoi il doit résoudre en tant que je sa discordance d'avec sa propre réalité.」。par quoi il doit の il を「自我」と取った。

【第9段落】

訳注1：ラカンはゲシュタルトを持ち出しているが、ゲシュタルト心理学については批判的である。身体イメージがゲシュタルトとして機能するとしても、ラカンは身体のリアルな状態と合致しないこと、イメージを我がものにすることが先行していること(「私」の側から言えば事後性)を重視しているからである。

訳注2：「プレグナンツ法則」と訳したのは la prégnance。ゲシュタルト心理学におけるプレグナンツ法則のことを指していると思われる。

訳注3：「先取りする」と訳したのは devancer という動詞。

【第10段落】

訳注1：「象徴的效果」は原文では l'efficacité symbolique である。レヴィ＝ストロース(1908-2005)は l'efficacité symbolique というタイトルの論文(1949)において、象徴的效果という概念でシャーマンによる治療について考察し、精神分析による治療との相似性を指摘している。原文にも注があり、この論文は、Revue d'histoire des religions. Janvier-Mars 1949(『宗教史レビュー』1949年1月-3月号)に掲載されたとある。

【第11段落】

訳注1：イナゴは、ふだんは孤独相と呼ばれる形をしているが、一定の条件下で長距離飛行が

可能である群生相という形に変化し、蝗害をもたらす。ラカンは孤独相から群生相への移行をもたらすのは、同じ種のイナゴの動き（それと似た動きでもよい）を見ることであると述べている。現在の研究によれば、移行の引き金となるのは視覚的刺激ではなく、集団の密度が高まって他の個体との接触が頻繁になることであるようだ。

訳注2：ラカンはここで、美の観念と同型的同一化に関連づけている。

【第12段落】

訳注1：枯葉そっくりの形をしている蛾など。

訳注2：ロジェ・カイヨウ（1913-1978）は1935年に「擬態と伝説的精神衰弱」という論文を発表した。この論文は『神話と人間』（1938）に収録されている。カイヨウは、生き物の擬態という現象が神話の中で語られてきたことに注目した。

訳注3：カイヨウは、昆虫の擬態は環境への同化であり、空間への強い捕らわれという点から見れば、精神衰弱と共通するものがあると考えた。

【第13段落】

訳注1：アンドレ・ブルトンの「Introduction au discours sur le peu de réalité」（わずかな現実性についてのディスクールへの序論）（1927年に出版）を指している。

【第14段落】

訳注1：原文では「l'organisme」。有機体ではなく生物と訳した。

訳注2：「内界と環世界」の原語は「de l'Innenwelt à l'Umwelt」。ヤーコプ・フォン・ユクスキュル（Jakob Johann Baron von Uexküll, 1864-1944）の *Unterwelt und Innenwelt der Tiere* (1909)（邦訳のタイトルは『動物の環境と内的世界』）を指している。

【第15段落】

訳注1：原文では「une certaine dehiscence de l'organisme en son sein」。具体的に何のことを指しているのか不明。

訳注2：錐体路は随意運動を司る神経伝達路。

訳注3：原文では「rémanences humores de l'organ-

isme maternel」。具体的に何のことを指しているのか不明。ヒトの授乳期間が長いことを指しているのだろうか。

【第16段落】

訳注1：原文は「la prévalence」。

訳注2：原文は「fœtalisisation」。オランダの解剖学者ルイス・ボルク（Lodewijk Bolk, 1866-1930）が唱えた、ヒトは胎児の状態で生まれるという説のことを指している。

【第17段落】

訳注1：「内的圧迫」の原語は「la poussée interne」。

訳注2：「似姿」の原語は「leurre」。疑似餌（ルアー）という意味があり、ラカンが想像的次元の認識についてよく使う言葉。想像的次元の認識はイメージを受け取ることであり、見かけを本物だと誤認する作用と、仕組みとしては同じである。

訳注3：「寸断された身体のイメージ」の原語は「une image morcelée du corps」。乳児は手足の動きを調節することができず、身体を部分的にしか経験できない。ラカンはこの状態のことを「寸断された身体」と言う。ここにはメラニー・クラインの妄想分裂態勢に通じる捉え方がある。

訳注4：「正しく整った」の原語は「orthopédique」。この語は整形外科的という意味だが、ここでは「ortho-」というギリシア語由来の接頭語に沿って、「正しく整った」という訳語にした。

訳注5：鏡像というまとまりのある像を我がものにする事で、寸断された身体という不安定な状態から人は守られるようになる。しかし、鏡像の完全性と乳児のリアリティは決して合致しない。人は鏡に映る像に同一化することによって、自分のリアリティを裏切ってしまう。

【第18段落】

訳注1：ヒエロニムス・ボス（Hieronymus Bosch, 1450年頃-1516）はルネサンス期のネーデルラントの画家。初期フランドル派。代表作は『快樂の園』。

訳注2：ヒステリーという精神疾患において手足のマヒや硬直という症状がよく見られる。し

かし、それらの症状の広がり方は神経解剖学的には説明できないことが多い。ヒステリー患者が抱いている幻想の解剖学における脆弱な部位において、マヒや硬直が発生する。

【第 19 段落】

訳注 1: 「高みを目指して」の原語は「dans sa quête de l'altier」

訳注 2: 「固く防御された建造物のこれらの構造」の原語は「ces structures d'ouvrage fortifié」。

【第 20 段落】

訳注 1: 「言語の技術」の原語は「une technique de langage」。フロイトは夢を解説可能なテキストであるとみなした。夢形成のメカニズムとしてフロイトは圧縮や置き換えを挙げていて、ラカンはそれを暗喩（メタファー）、換喩（メトニミー）と解釈する。

訳注 2: 「手がかりの一覧表」の原語は「la grille directrice」。象徴を解釈する際の手がかりとなる対応表のようなものだろうか。

【第 21 段落】

訳注 1: ラカンはここで「Mademoiselle Anna Freud」と書いているので、直訳すれば「アンナ・フロイト嬢」。

訳注 2: アンナ・フロイトの『自我と防衛』（1936）を指している。この著書においてアンナ・フロイトは自我の防衛機制を整理している。ラカンが 1949 年にこの論文を発表したときアンナ・フロイトはもちろん存命であり、国際精神分析協会におけるきわめて重要な人物であった。ラカンは、アンナ・フロイトの「自我心理学」とは徹底的に別路線を行くつもりなのだが、アンナ・フロイトに敬意を表している（少なくともその素振りは示している）。

【第 22 段落】

訳注 1: 「同類」の原語は「le semblable」。似た存在のこと。

訳注 2: シャーロット・ビューラー（Charlotte Bühler, 1893-1974）は発達心理学者。転嫁とは、子どもたちが遊んでいて、自分が叩いたのに他の子が叩いたと言うような現象のこと。

これは子どもたちの間に相互同一視があることによる。

【第 23 段落】

訳注 1: 「他者の欲望」の原語は「désir de l'autre」。

【第 24 段落】

訳注 1: 原文は「au jour de notre conception」。

訳注 2: 原文は「Le terme de narcissisme primaire ~ révèle chez ses inventeurs, au jour de notre conception, le plus profond sentiment des latences de la sémantique.」。直訳すると、「一次的ナルシズムという用語は、私たちの鏡像段階という概念が発表された日に、その発案者たちにおいて、意味論の潜在の最も深い感覚をあらわにします。」となる。要するに、フロイトの一次的ナルシズムという概念を鏡像段階という概念を介して理解したら、一次的ナルシズムという概念に潜在的に含まれている意味をより深く理解することができる、ということであろうか。

訳注 3: ラカンはここで、「私」というものが持つ疎外する機能を攻撃性と並置している。攻撃性を説明するために破壊の本能や死の本能を持ち出すよりも、「私」というものが持つ疎外する機能に注目しようという趣旨であろう。

訳注 4: 「解き明かしてくれる」の主語は原文では「Elle」である。これを「鏡像段階という概念」と取った。

【第 25 段落】

訳注 1: ジャン・ポール・サルトル（Jean-Paul Sartre, 1905-1980）の『存在と無－現象学的存在論の試み』（1943）のことを指している。ドイツ軍支配下に出版され、実存主義ブームのきっかけとなった著作。したがってここで「現代哲学」と言われているのは実存主義のこと。

【第 26 段落】

訳注 1: ラカンは実存主義に言及するが、実存主義をかなり批判的に見ている。

訳注 2: フランクル（Viktor Emil Frankl, 1905-1997）の実存分析のことを言っているのだろうか。辛辣な言い方をしている。

【第 27 段落】

訳注 1：1949 年はまだ第二次世界大戦の記憶が生々しい頃である。

【第 28 段落】

訳注 1：まわりくどい言い方だが、ようするに、実存主義は自我心理学と同じではないか、ということ。

訳注 2：「アンナ・フロイト氏がかくも力強く明確化したすべての構造において見て取れるように」という書き方は、一見、アンナ・フロイトに敬意を表しているようだが、ラカン は自我心理学を評価していない。アンナ・フロイトが細かく分類した自我の防衛機制に言及しているが、ラカンが言いたいのは、「錯覚の機能こそ自我を特徴づけている」ということである。錯覚（*méconnaissance*）とは、見えているとおりのものがあると思ひ込むことであり、認識欠如という訳語もある。

【第 29 段落】

訳注 1：「無力さ」の原語は「*cette inertie*」。ラカンは一貫して自我心理学を批判している。自我を自己同一的、自己完結的、同時的なもの

とみなすことをラカンは認めない。ラカンにおいては、鏡像という他なるものを先取的に我がものにすることが自我の出発点である。

【第 30 段落】

訳注 1：「都市の受難」の原語は「*passions de la cité*」。

【第 31 段落】

訳注 1：「想像上の隷属の結び目」の原語は「*ce noeud de servitude imaginaire*」。

【第 32 段落】

訳注 1：フロイトはキリスト教的隣人愛をほぼ全否定している。精神分析は、利己的であることを咎めて利他的であることを勧めるという発想をしない。ラカンは、利他的と言われる感情や行動であっても、そこには攻撃性が潜んでいると言う。

【第 33 段落】

訳注 1：「おまえはそれだよ」の原文は「*«Tu es cela»*」。

この研究資料は、2020 年度特別研究員の成果です。